MEMENTO=VITA VESTIGIA VITAE

ARCHIVE
// 001

研究者

アレク

Researcher
Alec Valen
Age / 45

もう一度だけ、
その領域に手を伸ばす
ことができるのなら

SECTOR VITA
UNDER GROUND
X - 782.51
Y - 414.62
LAST RECORD
17:00:00
SIGNAL STATUS
ALIVE



PROFILE

《託生者創造計画》を主導した人物であり、
計画の立案から実行までを担った科学者。
託生者の創造技術と倫理構築、その両面に
深く関わっている。

キャラクターブック

ストーリー （公開情報）

数百年前、アンドロイド産業は飛躍的な発展を遂げた。
開発者のアンディ博士は、人類とアンドロイドが共存する夢を見て、人間に限りなく近いアンドロイドを生み出した。だが、アンドロイドはやがて思想の違いから二つの派閥に分かれる。

人類との共存を望む穏健派と、人類そのものを否定し、滅ぼすべき存在とみなす過激派である。
穏健派アンドロイドは、人間と見分けのつかない外見、そして、共存を望む平和な意志。
彼らは人間との争いを避けるために、人類の前から姿を消した。

過激派アンドロイドは、人間の外見を捨て、強硬な意志を持ち、人類との戦争を選んだ。
激しい戦いの末、この戦争は人類の勝利で終結したと記録されている。
戦争の終結後、長い沈黙を経て、穏健派アンドロイドは再び人類の前に姿を現した。

そして 2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が結ばれた。
そして、人類と穏健派アンドロイドによる連合組織《ユニオン》が発足する。
だが、その瞬間を境に、世界は再び崩れ始めた。

協定の成立、そしてユニオンの結成とほぼ同時に、過激派アンドロイドによる全面攻撃が開始されたのだ。――敗北したはずの過激派アンドロイドたちは、滅びていなかった。
彼らは長い年月、影に潜みながら、その機会を窺っていたのだ。

穏健派アンドロイドはユニオンの一員として人類に協力し、過激派アンドロイドとの《第二次アンドロイド戦争》に突入した。その戦いの中で大量破壊兵器が使用され、地上環境は急速に汚染された。
都市は崩壊し、多くの人命が失われる。生き残った人類は、わずか一億にまで減少した。

限られた資源、減り続ける兵力。この戦争を生き延び、そして勝利するために、
ユニオンは新たな生命を創造するという選択に踏み込む。

研究施設《セクター・ヴィータ》。
そこは、ユニオンによって造られた、生命を再構築し、記憶を継承するための領域。
そこで生み出されたのは――人類の意志を宿す、新たな生命《託生者（たくせいしゃ）》だった。

登場人物　（公開情報）



統括官 / ヘクター・ソリス（NPC）：Hector Solis

人間。４５歳。男性。

セクター・ヴィータにおける最高責任者。一般的に『**統括官**』と呼ばれている。主に戦闘指揮を担い、兵士一人ひとりの命を背負う立場として、可能な限り犠牲を抑えることを責務としてきた。彼にとって、穏健派アンドロイドの生命もまた、人間と同等の価値である。しかし、人類存続のためであれば、冷酷な決断を下すことも厭わない覚悟を持っていた。



ルピナス（NPC）：Lupinus

穏健派アンドロイド。製造から数十年が経過している。女性型。

セクター・ヴィータでは統括官の補佐を務めると同時に、穏健派アンドロイド全体を束ねる指導者的立場にある。主に施設の管理・制御を担う。人類との共存を望む穏健派アンドロイドの意志を受け継ぎ、その象徴として創られた存在。

数年前に身体を損傷したが、資源不足により修復は不可能。

そのため、現在は生命維持ポッドの中で過ごしており、連絡を取る際はモニター越しに通信を行う。



研究者 / アレク・ヴァレン：Alec Valen

４５歳。男性。一人称は「わたし」

《託生者創造計画》を主導した人物であり、計画の立案から実行までを担った科学者。託生者の創造技術と倫理構築、その両面に深く関わっている。



カウンセラー / バーバラ・ロウ：Barbara Rowe

２０歳。女性。一人称は「わたし」

ユニオンの兵士および託生者の情報記録を管理する担当者。

戦闘記録や個体データの整理に加え、戦場に立つ者たちの精神を支える役割も担っている。

登場人物　（公開情報）



オペレーター / クララ・ヴァレン：Clara Valen

２０歳。女性。一人称は「わたし」

セクター・ヴィータのオペレーターを務める非戦闘要員。

戦闘能力は持たないが、統括官の指揮のもと、戦場に展開する兵士へ情報・命令を伝達し、後方から作戦を支えている。



突撃兵 / ディーン・カルダー：Dean Calder

40歳。男性。一人称は「俺」

戦闘能力を備えた最初の託生者として誕生し、数多の戦場で成果を残してきた存在。セクター・ヴィータの象徴的戦力であり、勝利の要でもある。

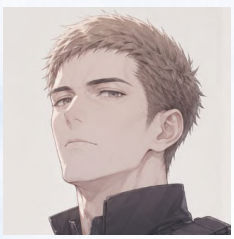


遊撃兵 / エヴァ・ソリス：Eva Solis

２２歳。女性。一人称は「わたし」

統括官の娘として生まれ、人間の兵士として前線で戦果を重ねてきた。

託生者となった後も、その選択を疑うことなく、人類のために戦い続けている。



工作員 / フリッツ・クライン：Fritz Klein

２０歳。男性。一人称は「俺」

前線で戦うことは少なく、主に偵察や潜入など、影から戦場を支える任務を担っている。その判断と行動は、多くの戦況を左右してきた。



参謀 / グレイ・ノア：Gray Noah

２２歳。男性。一人称は「僕」

極めて高い情報処理能力を備え、変化する戦場の状況に即応できる。統括官の指示が届かない現場においても、自ら判断を下し、その選択によって多くの仲間の命を救ってきた。

キャラクター背景

――生命を創ることは、罪なのだろうか。
人は古くから信じてきた。生命の創造は神の領域だと。だが、その神の領域に、人はすでに何度も手を触れてきた。火を手に入れ、機械を生み、思考する装置を作り出す。
私の先祖には、その境界を越えた男がいた。アンドロイド開発者、アンディ博士。
“創造主”と呼ばれた科学者だ。彼は機械に思考を与えた。無機物に意志を宿らせた。
ならば――その次に来るものは何だろう。思考の先に。意志の先に。
もし、その果てに“生命そのものの創造”があるのだとしたら。人は、そこへ辿り着くことを許されているのだろうか。それとも――決して触れてはならない“神の領域”なのだろうか。
その問いに、私は魅せられていた。いや。取り憑かれていたと言うべきだろう。
“生命の創造”。――すなわち、人間を創ること。それが、私の研究だった。

私の研究を支えてくれたのが、二人の助手だ。昔からの友人、カシウス。そして、セレナ。
私たち三人は、共に研究を進めていた。だが、ある日、カシウスは私に告げた。セレナと結婚する、と。
しかし、私は――心の底から祝福することができなかった。
なぜなら、私もまた、セレナを愛していたからだ。だが、私情を研究に混同するわけにはいかない。
だからこそ、私は二人の幸せを願うことにした。

そして研究は、やがて大きな成果へと近づいていった。私たちはついに、人間の身体を人工的に生成する理論を完成させたのだ。人の肉体を構成する細胞構造。DNA の配列。神経ネットワークの形成。
それらを完全に再構築することで、人間の身体を人工的に形成する技術。
ある特殊な“液体”を用い、DNA と細胞構造を再配列する。神経系、骨格、筋肉、臓器――すべてを再構成することができる。神経信号は正常に伝達される。血液循環も問題なく機能する。
理論上は、完全な人体だった。だが、その理論には一つだけ問題があった。
その液体を生成するために、使われる資源。それは――“人間の身体”だった。
私は、人間の身体を高純度の生体溶液へと分解する理論を確立した。肉体を構成するすべての要素を分離し、再構築可能な形で保存する。そしてその液体から、再び人体を生成する。一つの身体を溶かし、一つの生命を生み出す。その理論を発表したとき、多くの人間が私を非難した。
「人間を、資源だと言うのか」
「生命を創るために人の命を使う？それに何の意味がある」
彼らは怒り、嫌悪し、そして恐れた。だが私は理解していた。彼らの言うことは正しい。
それは倫理的に許される研究ではなかった。

私が研究に行き詰まっていた頃、セレナに子供が生まれた。カシウスと彼女の子供だった。
私はそのとき、初めて“生命の創造”というものに触れた。
腕の中にあるのは、驚くほど小さな命だった。温かく、柔らかく、かすかに動く。

それは、これまで私が研究室で見てきたどんな生命とも違っていた。
ただ、愛おしいと感じた。その子は、クララと名付けられた。
だが、生まれて間もなく。クララに大きな問題が見つかった。先天的な神経・筋肉系の障害。
彼女の足は動かなかった。この子は……生涯、自分の足で歩くことはできないそうだ。
セレナは泣いていた。だが、その隣で。カシウスは、まったく違うことを言った。
「これは、研究を進めるチャンスじゃないか。クララを一度溶かして、新しく生成すればいい」
彼の目は、本気だった。だが――それは、私自身が研究していた理論と、何も変わらない。
もちろん、セレナは激怒した。そして、事故は起きた。
言い争いの末、セレナと揉み合ったカシウスは、足を踏み外した。身体が傾き、そのまま階段を転げ落ちる。鈍い音が、廊下に響いた。カシウスは、死んだ。セレナは、夫を殺したという罪に追い詰められていた。だからこそ。私は決断した。カシウスを一度、溶かすことを。
――そして、もう一度、生成することを。

肉体は生成された。だが――ただ一つだけ。どうしても再現できない臓器があった。“心臓”だ。
どれほど精密に再構築しても、その心臓は長く機能しなかった。鼓動は始まる。だが、すぐに止まる。
何度試しても同じだった。そのとき、私は理解した。生命活動としての“心臓”は、
ただの循環ポンプではないのだ。人間の心臓とは、単なる臓器ではない。それは――生命そのものだった。生命は生まれ、やがて活動を終える。その循環の中にこそ、生命の摂理がある。
そしてその摂理に――人間は、決して介入することはできない。そこは、神の領域なのだ。
こうして、私の研究は終わりを迎えた。生命の創造。それは――ついに成し遂げることができなかった。私はカシウスを、再び液体へと戻した。そしてその液体を、静かな海へと流した。
それが、私にできる唯一の弔いだった。

それからの一年。私はセレナを支え続けた。やがてある日、セレナは静かに言った。
「クララの父親になってほしい」
私は、今でもセレナを愛していた。だが彼女は、ただ何かに縋りたかっただけなのかもしれない。
それでも――私は決意した。セレナの夫となり、クララの父親となる。
そして。二人を守ると、誓ったのだ。

クララは、少しずつ成長していった。だが、やはりその足には問題があった。彼女は、自分の意志で歩くことができない。その日も私は、クララを背中に背負っていた。こんなふうに子供をおんぶして歩く日が来るなど、かつての私は想像したこともなかった。夕暮れの街が、ゆっくりとオレンジ色に染まっていく。遠くに伸びる道路。帰り道を急ぐ人々。クララは、その景色を眺めるのが好きだった。
しばらく黙って見つめていたクララが、ぽつりと呟いた。
「お父さん、夕焼けきれいだね」

クララと話をしていると、やがて静かになった。眠ってしまったようだ。
私はそっとクララを背中から降ろし、車椅子へと座らせた。そして、そのまま帰路についた。

その夜もまた、セレナはクララを抱きしめて泣いていた。この光景を見るのは何度目だろう。
「クララ、ごめんね……。元気な体で産んであげられなくて……ごめんなさい」
彼女は、何度も同じ言葉を繰り返した。クララは、困ったような顔を伏せた。きっと——そんな言葉を、彼女は望んでいないのだろう。だからこそ。私は、妻の代わりに。クララを、たくさん笑わせたい。彼女を幸せにすることが、私の願いだった。

私はクララを背負い、いろいろな場所へ連れて行った。家の前の道、公園、少し遠くの丘。車椅子に座っているときのクララは、どこか元気がない。だが、私の背中にいるときは違った。よく笑ってくれた。ただ、私はいつも「クララのために」とは言わないようにしていた。
クララは、人に何かをしてもらうたび、嬉しそうにしながらも、どこか申し訳なさそうな顔をする子だった。だから私は、なるべくこう言うことにしていた。
「今日は、父さんが夕焼けを見たいんだ。付き合ってくれるか？」
そう言うと、クララは少し不思議そうな顔をしたあと、小さく頷いた。

私は彼女を背負い、夕焼けの見える道へ向かった。クララを背負って歩くと、いつもの景色が少し違って見えた。背中越しに聞こえる小さな声や、肩に添えられた手の温かさが、私にとっても大切だった。
「クララ、今日は特別だ。しっかりつかまっていろ」
そう言うと、私はクララを背負ったまま、その場で走り出した。
「風がきもちいい！」
クララが楽しそうに声を上げた。どうやら喜んでくれているらしい。
「どうだ、速いだろう！」
少し得意げに振り返ると、クララは目を輝かせた。
「もう一回！もう一回！」
だが、子供を背負って走るのは、かなりきつい。
「体育会系ではないんだ……ちょっと、体力が……。でも、あと一回だけだ」
そう言いつつも、私はもう一度だけ走った。走り切ると、その場に座り込む。
「今日はここまで。これ以上やると、父さんが明日動けなくなる」
そう言って笑うと、クララは慌てたように謝った。
「ごめんね。私のために……」私は、少しだけ困った顔をした。
「違うよ、クララ。父さんは、クララのためだけに走っているわけじゃない。父さんはね、クララが笑うところを見るのが好きなんだ。それに、クララを背負っていると、いつもの道も少し違って見える。父さん一人なら、きっとこんなに夕焼けを見ようとは思わなかった」

私は、クララの目線に合わせるようにしゃがんだ。
「父さんも嬉しいんだ」
クララは少しだけ安心したように、夕焼けの方を見た。その横顔を見て、私は思った。
この子に、自分が誰かの負担なのだと思わせたくない。
クララがここにいることで、私の世界も確かに変わっているのだと、何度でも伝えたかった。

そんなある日のことだった。クララが突然、胸の痛みを訴えた。そのまま、その場に倒れ込んだ。
私は慌てて彼女を抱き上げ、すぐに病院へ連れていった。長い検査のあと、私は医師に呼び出された。
「大事なお話があります。ご両親を呼んでいただけますか」
だが、セレナはすぐに来ることができなかった。私は事情を説明した。クララの親権は私が持っていること。私が父親であることを。医師はしばらく沈黙したあと、静かに口を開いた。
「クララさんの心臓に、大きな病気が見つかりました」
その言葉だけで、胸が締め付けられた。医師は続けた。
「医学的に治療する方法はありません。おそらく……二十歳までは、生きられないかと」
その瞬間、頭の中が真っ白になる。…なにも言葉が出なかった。

私はセレナに、すべてを話した。クララの病気のこと。医師の宣告のこと。
話し終えたとき、セレナは崩れるように泣き出した。そして、震える声で言った。
「私が……私の心臓を、あの子に移植すれば……助からないの！？」
「あの子はまだ小さすぎる。それに、クララを置いて君が死ぬというのか！？そんなことが許されるわけがないだろう！それに、そんなことをして、クララが喜ぶと思うのか？」
私は必死にセレナを説得した。そのときだった。車椅子に乗ったクララが、ゆっくりこちらへ近づいてきた。今の話を……聞かれていたのかもしれない。クララは、静かに言った。
「私は、嫌だよ……お母さんの命をもらってまで、生きるなんて嫌だ」
そして、私とセレナの手をそれぞれ握った。
「私の願いは、いつだって一つだよ」
その小さな手は、力強かった。
「お母さんと、お父さんと、私。三人で幸せに暮らせれば、それでいい。そこに、お母さんがいないなんて嫌。ただ…みんなで笑って暮らしたい。それって…そんなに難しいことなのかな？」
私は、言葉を失った。クララの願いは、あまりにもささやかだった。ただ、家族で笑って暮らしたい。
それだけだ。それだけのことが――どうして叶えられない。
彼女が、何をした？実の父親に見捨てられ、その事実すら知らないまま生きている。
不自由な身体を、嘆くことはあっても、誰も恨まない。
ただ笑って、ただ家族と一緒にいられることを願っている。その小さな願いすら奪うというのか……。
これが、神の定めた摂理だというのなら。私は――その神を憎む。

そのとき。私は思い出していた。かつて、自分が捨てた研究を。“生命の創造”。
肉体は再現できた。神経も、血液も、臓器も。だが――心臓だけが、再現できなかった。
私はそのとき悟った。そこは人間が踏み込んではならない領域。神の領域なのだと。
だが、――もう一度だけ、その領域に手を伸ばすことができるのなら。
もし、クララを救える可能性があるのなら。私はもう一度――“生命の創造”に挑むべきだ。
私は二人を強く抱きしめた。
「私が、必ずなんとかする。セレナ。かつてのように……私の研究を手伝ってくれないか？」
そして、クララの頭をそっと撫でた。
「少し時間がかかるかもしれない。だけど、必ず――クララの願いを叶えると、誓うよ」
こうして、私は再び研究に手を伸ばそうとした。
だが――世界は、決して人間の都合で動いてはくれないのだ。



１０年前（35 歳）

2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が締結された。
両者による連合組織《ユニオン》が発足する。だがそれは同時に、第二次アンドロイド戦争の幕開けでもあった。過激派アンドロイドとの全面衝突。多くの生命が失われ、彼らが保有していた大量破壊兵器によって、地上は急速に汚染されていった。
私は家族を連れて、統合生存圏へと避難した。そこは戦争を生き延びた人類が集められ、生活のすべてが一元管理される巨大な居住区だった。外縁では、人類を守るための防衛線が今も維持されている。
私たちが暮らしていたのは中央付近。比較的安全な区域だと教えられていた。
やがて、穏健派アンドロイドが秘密裏に建設していた地下シェルターが、人類へ提供されることになった。地上の劣悪な環境に耐えられない人々から優先的に移住が進められ、移住は段階的に行われていった。私たち家族は、第三次移住者だと聞かされていた。
――だが、その日。事件が起きた。

地下シェルターへ避難していた第一次移住者と第二次移住者、あわせておよそ三千万人が命を落としたという。公式発表では、地下シェルターの防衛システムが過激派アンドロイドに掌握され、内部に備えられていた銃火器が暴走。それにより、多くの犠牲者が出たとされていた。
この惨劇は、《シェルター制御喪失事件》そう呼ばれることになる。
――巻き込まれなくてよかった。私たちにあるのは安堵だった。
やがて、シェルター内の防衛システムは撤廃された。その代わりに、搬入用エレベーターの防衛体制が大幅に強化された。それからしばらくして、地下シェルターへの移住が再び始まった。
長い準備の末、移住は無事に完了した。そして私たち家族にも、居住区画が与えられた。
それが、私たちの新しい家だった。だが研究環境は変わってしまった。研究場所も以前とは違う。
この新しい環境で、かつてのように研究を続けることができるのか。私は、少し不安を感じていた。

８年前
この日も、夜遅くまで研究を続けていた。セレナは、私に休むように言ったが、あれから２年。
なんの成果も得ることはできていない。それは、単純に施設、資金不足が原因だった。
さらに、この戦争時だ。資源は刻一刻と、減るだろう。私は、次第に焦りを感じていた。
クララに残された時間。それは、残り８年しかなかった。

ある日、私はクララを連れて孤児院を訪れていた。クララを車椅子に乗せ、ゆっくりと廊下を進む。
最近、私は研究に追われ、クララと過ごす時間が減っていた。
同じ年頃の子供たちと出会えば、きっといい刺激になる。そう思ったからだ。
孤児院で待っていたのは、統括官と呼ばれる男だった。彼は話を切り出した。
「君の論文を読んだことがある。人体生成の理論。当時は倫理的な問題で非難された研究だ」
あの研究がどれほどの反発を生んだのか、私自身が一番よく知っている。
「だが、あの研究の本当の価値を知る人間は……今ではほとんど残っていない。私は思うのだ。
今こそ、“生命の創造”が必要なときではないかと」
「あなたの目的は？」
私は彼に質問した。すると、統括官はためらうことなく答えた。
「死なない兵士を作ることだ。肉体を失っても、再び“身体”を与えられる兵士。君の研究には、その可能性を感じた」その言葉に、私は眉をひそめた。
「この世界では、今も多くの人間とアンドロイドが戦っている。私は、その命を戦場へ送り出す立場だ。
そして――帰ってくる命は、決して多くない。だから私は願っている。兵士が、死で終わらない戦場を」私は、静かに答えた。
「だが……肉体を生成するには資源が必要だ。その資源が何か、あなたは知っているのか？」
「知っている」統括官は、わずかに頷いた。
「それが人間の身体だということも、理解している」そして、静かに続けた。

「毎日、多くの兵士が命を落としている。私は彼らを戦場へ送り出した。だからこそ思うのだ。彼らの命を、無駄にはしたくない。もし彼らの身体が、次の命を生み出す資源になるのなら……
それもまた、彼らの戦いの続きではないだろうか」
統括官は、戦争で命を落とした人間の身体を資源として使おうとしていた。だが、統括官の目は真剣だった。そこにあるのは、狂気ではない。戦場で命を送り出し続けてきた者の覚悟だった。私は言葉を失った。そして同時に、理解していた。これは願ってもない環境だ。ユニオンの支援。潤沢な施設。研究を進める条件は揃っている。だが、その代償として。私の研究は、軍事利用されるだろう。
統括官は静かに言った。
「……私は君の研究を利用するつもりだ。だが――私も、二人の娘を持つ父親なのだ。だからこそ、君の娘を救うことも……本気で願っている」
その言葉には、嘘はないと感じた。私は――統括官の提案を受けることにした。それから何度かの話し合いを経て、私と妻はセクター・ヴィータの研究員として迎えられることになる。
そして私たち家族は、セクター・ヴィータで暮らすことになった。

５年前

研究は、この施設の支援によってようやく動き始めていた。だが、生命の創造は依然として難航していた。原因は、心臓だ。そんな私のもとへ、一体のアンドロイドが訪ねてきた。
「初めまして。私は“リリアン”と申します。あなたがアレクさんですね」
リリアンは、行き詰まっていた私の研究に興味を示し、アンドロイドの創造について話してくれた。アンドロイドもまた、ひとつの生命の創造だ。その話を聞いて、私はかつて【アンドロイド暴走事件】について記された歴史書をよく読んでいたことを思い出した。
アンドロイドの中心には、《コア》と呼ばれる動力中枢が存在する。人間の心臓と、ほぼ同じ大きさ。そして、そのコアは――かつて心臓の代わりとして、人体の循環機能を維持した事例があるという。
私は、その話を聞いて考えた。
クララに残された時間は、もう多くない。ならば。アンドロイドのコアを心臓として利用し、それを中心に循環する身体を生成すればいいのではないか。そうすれば、クララは歩けるようにもなる。
だが、問題は残る。記憶だ。だが、その疑問に、リリアンは静かに答えた。
「人間の記憶を、アンドロイドのコアに保存するのはどうでしょう？そして、その情報を脳が読み取るようにすれば…。記憶というデータが存在する限り、その人は新しい身体でも自分として振る舞うことができます」それならば、と。私は、意見を述べた。
「だが、資源不足のいま、アンドロイドの修理すら困難だ。コアが手に入るとは思えない…」
「託生者は、亡くなった人間を資源にすると聞いています。そして、私たちアンドロイドにも覚悟があります。ならば――役目を終えたアンドロイドのコアを利用するのはどうでしょうか」
その目は真剣だった。かつて統括官が見せたものと、同じ目だった。だからこそ、私はその意志を受け止めることにした。リリアンとの議論は、夜遅くまで続いた。

「さらに、アンドロイドの戦闘技術も読み取れないか？それに耐えうる身体を生成することができれば、統括官の言う軍事利用にも応用できるかもしれない」
議論の末――ついに私は、研究の完成形に辿り着いた。死亡した人間。役目を終えたアンドロイド。その二つの犠牲を資源とし、新しい生命を生み出す。
それは――人間でも、アンドロイドでもない。新しい“生命の形”だった。私は、興奮していた。
これなら。これなら、クララを助けることができるかもしれない。
だが、そのとき。私は、ふと思い出してしまった。昔、クララと議論したことを。
私は統括官に研究方針を伝えた。その計画は、やがてユニオンの一大プロジェクトとして動き出すことになる。統括官は、その計画に名を与えた。《託生者創造計画》。託生者――戦場で命を落とした者たちの遺志を、次の存在へと託す。その願いを込めて、統括官が名付けた名だった。

私はクララを呼び出し、計画の内容を伝えた。彼女は、私が人体生成の研究をしていたことを知らない。だから私は、できるだけ順を追って説明した。クララの心臓の代わりに、アンドロイドのコアを移植すること。そして――今の肉体を捨て、新しい身体を生成すること。だが私は、言葉を慎重に選んだ。記憶は失われないこと。思考もそのまま残ること。それを、誤解されないように。
そして何より――彼女に、その本当の意味に気づかれないように。私は必死だった。
「クララ……君は歩けるようになる。走れるようにもなるんだ！」
だが、クララは少し考えたあと、ゆっくりと言った。
「託生者になるとき、私は今の体を捨てるんだよね」私は黙って頷いた。
「記憶は残る。思考も残る。同じ構造の身体も作れる」クララは少しだけ間を置いた。
「でも、それって……本当に今の私なのかな？」
……私は答えられなかった。
「昔、お父さんが教えてくれたよね。スワンプマンの話」

それは哲学の思考実験だった。ある人間が雷で消滅し、まったく同じ構造、同じ記憶、同じ外見の存在が偶然生まれたとする。それは――本当に“その人”なのか。という内容だ。
当時、クララに私はこう語った。
「私は同一人物とは思えない。なぜなら、存在というのは、記憶じゃなく生きてきた過程そのものだからだ」
それは間違いなく、私の言葉だった。だが――やがて私は気づくことになる。そしてクララも、気づいてしまったのだ。もし人間の身体を作り直すことができるのだとしたら。もし歩けない身体を捨て、新しい身体を与えられるのだとしたら。それは――本当に“同じ人間”なのだろうか。
もし違うのだとしたら。私は、いったい何を救おうとしているのだろう。
クララの命か。それとも――クララではない、別の誰かなのか。――だが。私は、答えを出さなければならなかった。苦渋の決断だった。それでも。今は、これしか方法はないのだ…。

「……私、やるよ」クララは静かに言った。
「お父さんの研究を否定したいわけじゃない。それに――これは、私のためでもある」
そして、少しだけ笑った。
「歩いてみたいんだ。一度くらい」

3年前

私はセレナのサポートを受けながら、リリアンとともに《託生者創造計画》を進めていた。
研究の合間、私たちは多くの時間を共に過ごした。そのたびに、様々な話をした。
あるとき、リリアンは静かに言った。
「もうすぐ、あなたは託生者を創り出します。……不安はありませんか？」
私は少し考えてから答えた。
「あるさ。私の先祖は、アンドロイドの開発者だった。だが、そのアンドロイドの暴走によって、世界は大きく変わった。託生者が、この世界に何をもたらすのか…私にも想像がつかない」
リリアンは、わずかに目を見開いた。
「あなたが、アンディ博士の……」
少しの沈黙のあと、彼女は言った。
「……もし託生者が暴走したら。誰かに危害を加えようとしたら。あなたには――それを止める覚悟がありますか？」
彼女の目は、まっすぐだった。私はしばらく答えられなかった。
「……もし、それがクララなら。正直に言えば、答えは分からない。だが、それが正しい選択だと分かっているなら……私は選ばなければならない。それこそが、生命を創る者の責任だと――理解しているからだ」
彼女の質問の意図は、わからない。だが、どこか納得したように頷いていた。

そして、その日。クララの託生者実験が行われることになった。実験の内容は、クララの脳にある記憶をコアへ保存するというものだ。だが、託生者の記憶を読み取るには、一つの問題があった。
アンドロイドのコアには、もともとそのアンドロイド自身の記憶情報が保存されている。
そのため、人間の記憶を正しく読み取らせるには――既存の記憶を、すべて消去しなければならない。
だが、それはアンドロイドにとって、存在そのものを消すことに等しい。
きっとクララは、それすら嫌がるだろう。私はそう考えた。だからこそ、事前にリリアンへ相談していた。そして彼女は新品のコアを用意してくれた。それは貴重なものだ。資源不足のこの時代において、残されていた最後の一つ。――この世界に、たった一つしか存在しないコアだった。
やがて、セレナが研究室に入ってきた。ベッドの上には、眠らされたクララ。
その傍らに、リリアンが立っていた。

「セレナ、準備ができた。――始めよう」
私はクララの頭部に装置を取り付けようとした。その瞬間だった。天井のパネルが外れた。男が一人、そこから飛び降りてくる。その手には銃。銃口が――クララを捉えた。次の瞬間。銃声。
そして、セレナがクララを覆いかぶさるように抱きしめていた。
一瞬の出来事だった。外の警備兵が駆け込み、男を取り押さえる。だが――私の目に映っていたのは、床に倒れた二人だった。血に染まったセレナ。その下には、クララの姿が。
“バイタル異常“モニターが警告音を鳴らす。
「すぐに処置を！」
リリアンの声が響いた。だが、私の頭は動かなかった。理解が追いつかない。
脳が、この現実を拒んでいた。それでも――動かなければならない。私はセレナの身体を抱き起こした。その瞬間、理解する。弾丸は心臓を貫いていた。セレナは即死だった。
「クララを託生者にするしかありません！」
リリアンが叫ぶ。私は頷きかけ――そして気づいた。床に転がるコア。
新品のコアだった。そこには銃弾が撃ち込まれていた。壊れている。
……記憶は保存できない。私はクララを見る。セレナが守ったのだろう。頭部は無傷だった。
だが、身体は酷く損傷していた。…ならば。記憶の残る頭部をそのままに、身体だけを新しく生成すればいい。きっと間に合う。しかし――それには資源が必要だ。人間の体。液体の原料。
私は、ゆっくり視線を落とした。そこに、セレナがいた。理解した。そして思った。
セレナなら、きっと分かってくれる。私は震える手で装置を起動した。セレナの身体を溶かし始める。最愛の人が、液体へ変わっていく。正気を保つのが限界だった。それでも、手を止めることはできない。セレナが守った命を。クララを。ここで死なせるわけにはいかなかった。
やがて、クララの身体は生成された。だが――問題は残る。
心臓だ。心臓だけは、創り出せない。
私は振り向いた。リリアンが立っている。
彼女は覚悟を決めた者の目をしていた。
だが――それは、君の役目じゃない。
「リリアン」そして続けた。
「私の心臓を、クララに移植してくれ。……私は、この子の父親なんだ」

……暗闇の中。どこからか、声が聞こえた。
「私は、ずっと苦しんでいました。……私には覚悟がなかったから」
……誰だ？
「創造主から託された、この遺志を。新たな創造主へ」
いったい、なにを言っている…？
「私は、ここで見届けようと思います。そのときを――“最後の選択”を」

そこで、私は目を覚ました。知らない部屋。ぼんやりとした意識の中で周囲を見渡していると、
そこには、謎のポッドが一つ。やがて、目の前のモニターが点灯した。
そこには、一人の人物が映し出される。初めて見る顔だった。
「君は……誰だ？」
私がそう言うと、その人物は一瞬、戸惑ったように目を見開いた。
「……やはり、記憶に障害がありますね。私はルピナスです。アンドロイドの統括官の補佐という立場ですが、覚えていませんか？」
私は、その名前を思い出そうとした。記憶を辿る。だが――思い出せない。
「無理をしないでください。まずは現状を説明します」
モニターに医療データが映し出される。
「クララの身体には、あなたの心臓が移植されました。そしてクララ本人には、託生者の実験が成功したとだけ伝えています」ルピナスは続けた。
「クララは、かつて言っていました。母の心臓をもらってまで生きるのは嫌だと。ですから、この事実は知らない方がいいでしょう」
それは、ルピナスの判断だった。
「アレク。あなたには……アンドロイドのコアを移植しました。ですが…この事実は、誰にも話さない方がいいと思います」
私はすぐに理解した。この事実から、クララが気づく可能性がある。
自分の胸で鼓動しているものが、誰の心臓なのかを。
「“託生者創造計画の実験中に起きたこと”は、誰にも話さないでください。すべては、クララのためですから」私は頷くと、ルピナスは通信を切ろうとする。
「そうだ、リリアンはどこにいる？」
彼女に移植のお礼を伝えなければ、そう考えたのだ。
「リリアン…ですか？セクター・ヴィータにそのような人物は存在しませんよ？」
リリアンが…いない？ルピナスは言い終えると、疑問を感じつつも通信を切った。
モニターが暗くなる。そこに、私の姿がぼんやりと映り込んだ。
私は胸に手を当てた。……鼓動を感じない。本当に、アンドロイドのコアが――。
ふと、胸の奥に小さな違和感が走った。なら、このコアの持ち主は……？
私は記憶を辿る。……あのとき。彼女は、覚悟を決めた者の目をしていた。――していたはずだ。
だが、おかしい。どうしても、その顔だけが思い出せない。
まるでそこだけ――白い霧に覆われたように。記憶の中で、ぼやけていた。

やがて、セクター・ヴィータの内部に噂が広まった。《託生者創造計画》の実験中、事件が起きた。現場にいた研究員アレクとクララが重傷。アレクの妻、セレナは死亡。そして――クララは託生者となった。そんな話だった。だが。その噂のどこにも、リリアンの名前は出てこなかった。

私は、クララに会いに行った。だが、彼女はひどく落ち込んでいた。
「どうして、私なんかのために！そんなこと、望んでいなかったのに……」
自分を庇って母が死んだことを、まるで自分の罪のように感じているようだった。ルピナスの予想通りだ。やはり、事実は知らない方がいい。その身体は、母親という資源から再生されたものだ。
そして今、その胸の中では、私の心臓が鼓動している。その事実は、娘を傷つけるだけだ。
私に話せることは、ほとんどない。静かに立ち上がり、部屋を出ようとした。
だが、扉の前で足が止まる。…これだけは伝えたかった。振り返らずに、私は言った。
「お前が望んでいなかったとしても…。クララが生きることを、私たちは望んでいたよ」
それは、セレナの遺した想いでもあり、今の私の願いでもあった。

その後、私は統括官の部屋へ向かった。
託生者の技術は、軍事利用できる形まで完成させなければならない。娘の命は助かった。
あとは、統括官との義理を果たすだけだ。私は、一つの方針を決めた。
託生者の身体に使われる資源――人間の遺体。その情報は、すべて秘匿する。提供者の身元も、経緯も公開しない。だが、それは提供者本人に同意を取ることはできないということだ。
すべては――クララに知られないためだった。
「許可しよう。今後生まれる託生者自身も、知らないほうがいい事実なのかもしれない。資源情報はすべて機密とする」統括官はそう言い、モニターへ目を向けた。
「ルピナスも、それでいいだろうか？」
モニターに映し出されたルピナスは、静かに頷いた。
「罪は――我々で背負えばいい」

翌日、クララが私のもとを訪れた。私は、その瞬間を生涯忘れることはないだろう。
クララは自分の足で歩いていた。ゆっくりと。だが確かに、その足で。ようやく私は実感した。
自分の研究が、実を結んだのだと。かつて私は、同じ記憶と同じ構造を持っていても、それは同一人物ではないと考えていた。存在とは記憶ではなく、生きてきた過程そのものだと、そう信じていた。
だが――理屈ではなかった。歩き出したその姿を、私はどれほど望んでいただろうか。
生きていてくれてよかった。それだけで、胸の奥が満たされていくのを感じていた。

そのとき、クララは何かを決意するように言った。母の代わりに、父の研究を手伝いたいと。
託生者の研究を、支えたいと。私はすぐに答えることができなかった。…ふと、考えてしまう。
私はもう、クララのそばにいない方がいいのではないだろうか。彼女はセレナによく似て、聡い子だ。きっと、いつか気づいてしまう。自分の身体が、何で作られているのかを。その真実が、どれほど彼女を傷つけるだろうか…。だからこそ私は、クララと距離を置くことに決めた。
私は首を横に振った。

クララは、私が拒否するとは思っていなかったのだろう。その顔に、はっきりと失望が浮かんだ。
「すまない、クララ。だが、お前には――お前の人生を生きてほしい。それが、妻の願いでもあった。地下シェルターに戻れ。好きなことを始めてもいい。ここは危険だ。……私には、まだやることがある」
クララが元気でいてくれるなら。ただ――生きていてくれるなら、それでよかった。

その日、私のもとへ二人の兵士と、一体のアンドロイドが運び込まれてきた。
だが、兵士の一人は、すでに死んでいた。すると、アンドロイドは静かに言った。
「それなら――ディーンだけでも、託生者にしてほしい」
彼は二人の兵士の部隊長だった。そして、自らのコアを使い、戦闘技術もすべてディーンに託すと言った。私は説明した。記憶が消えるということは、存在そのものが消えるということだと。
だが、部隊長の決意は揺らがなかった。
「ディーンには、帰る理由があるんです。……だから、その未来は、彼に残したいんだ」
やがて、ディーンは目を覚ました。私は彼に説明した。託生者になったこと。

そして、ディーンのコアには、戦闘型アンドロイドの部隊長の戦闘情報が記録されていること。
託生者となったディーンは、再び戦場へ送り出された。次々と戦果を挙げるその姿は、まさに統括官が望んだ託生者そのものだった。だが、ディーンはその後、何度も戦場で命を落とすことになる。
そのたびに仲間の遺体が資源となり、新たな身体が与えられた。
そして彼は、何度でも戦場へ戻っていった。

私は統括官に、託生者生成装置の使い方を説明した。肉体の生成そのものは自動で行われる。
仕組みさえ理解していれば、託生者自身でも新たな肉体を再生成することが可能だった。
「つまり、この装置で託生者をさらに増やすこともできるのか？」
私は首を横に振る。託生者は決して簡単に生み出せる存在ではなかった。
「生成に必要な資源は、時間の経過とともに細胞活性が低下するため、長期保管ができません」
統括官は、装置の中でコアを中心に肉体が形作られていく様子を見つめていた。
「なるほど。それに、過激派はこちらのアンドロイドのコアを的確に破壊していると報告を受けている。資源だけでなく、コアも必要になる……。簡単に量産できるものではない、ということか」
私は頷いた。統括官はしばらく考え込んでいた。
「一人だけ、託生者にしたい者がいる。必要な資源はこちらで用意する。任せてもらえないか」
後日、統括官自身がこの装置を使い、グレイを託生者として再生成したと報告してきた。

ある日、私はバーバラのもとを訪ねた。彼女が、カウンセラーのようなことを始めたと噂で聞いたからだ。娘を託生者にし、その技術を軍事利用することも実現した今、私は目的を失っていた。
……ただ、誰かと話したかった。

私がクララの父だと伝えると、バーバラは自分のことを話してくれた。
クララとは親しくしていたらしい。私が興味深く聞いていると、悩むようにして彼女は言った。
「クララは……死が近づく日々を、とても怖がっていました」
私は、そのことを知らなかった。だが同時に、そんな話を打ち明けられる友人が彼女にいたことを、どこか嬉しくも思った。バーバラは今、戦場で亡くなった兵士の記録を集めているのだと言った。
「この戦争が終わったとき、みんなに伝えたいんです。彼らのおかげで、私たちは生きているんだって」
机の上には、戦死した兵士たちの資料が並んでいた。
その中に――妻、セレナの名前もあった。私は話題を変えるように、別のことを尋ねた。
「探しているアンドロイドがいるんだ。戦死した人物を調べさせてくれないか？」
私は、リリアンの名前を調べた。だが、どこにも彼女の名前はなかった。静かな疑問が広がっていった。それから、私は今後も戦死した兵士の情報を彼女に提供することを約束した。
もちろんそれが、託生者の資源になるという事実は、彼女にも伏せたままだった。

半年前

私は、託生者の技術を他のセクターへと展開していった。だが、そのすべてを私一人で管理することはできない。そのため、各セクターから口の堅い技術者を選び、管理を任せることにした。
中でもセクター１の技術者は優秀で、託生者に起こり得る変化や異常を逐一報告してきた。
だが、私はその報告資料にあまり目を通さなかった。ディーンとグレイ。
二人の託生者がいる限り、セクター・ヴィータの軍事力としては十分だと考えていたからだ。

私は、クララがセクター・ヴィータのオペレーターとして働き始めたと知った。
だが、地下シェルターが決して安全な場所とは言えない。むしろ、ディーンとグレイがいるこの場所の方が、まだ守られているのかもしれない。そう思い知らされる事件が起きた。
その日、ユニオンの避難民が暮らす地下シェルターに危機が迫っていた。統合生存圏の中央にある搬入エレベーター。そこが、過激派アンドロイドの攻撃を受けたのだ。
もし侵入を許せば――シェルター内部の民間人は、全滅する。そこで、シェルターに最も近いセクター・ヴィータの戦力部隊が、すべて投入されることになった。だが、私にできることは少ない。

そのとき、私のもとへ三人が運び込まれてきた。統括官の娘が二人。そして、アイと呼ばれるアンドロイド。遅れて、統括官本人が研究室へ駆け込んできた。これほど取り乱した姿を見るのは、初めてだった。私は無言で、二人の娘の身体を確認した。エヴァは――極めて危険な状態だ。
そして、もう一人は……。次にアイを確認する。かろうじて、意識が残っていた。
「統括官……約束は、守れたでしょうか…？」
その言葉を最後に――彼女は静かに停止した。私も、統括官も理解していた。
アイのコアを使えば、娘を託生者にできる。だが、コアは一つしかない。

「頼む……二人を……助けてくれ……」
――同じ娘を持つ父として。その願いを叶えられるのなら、叶えたかった。
だが、私は伝えなければならなかった。
「統括官。託生者になれるのは――まだ“生きている人間”だけです」
もう一人の娘は、すでに死んでいた。その瞬間、統括官はその場に崩れ落ちた。液体へと変わっていく娘の姿を見つめながら、彼は、何度も、何度も――「すまない」と、繰り返していた。

やがて、エヴァは託生者として目を覚ました。私は彼女に、起きたことを説明した。
そこにバーバラがやってきた。統括官から聞いた情報をまとめ、彼女に手渡す。
バーバラは目を通し、やがて口を開いた。
「……確かに。これで、アイ部隊―エヴァを除く、全員の死亡を確認しました」
研究室に、沈黙が落ちた。エヴァはゆっくりと、自分の両手を見つめていた。
「だって……私は、二人を守るために……なんで……どうして……」言葉が途切れる。
傷ひとつない、託生者の身体。エヴァはただ、絶望したように、その両手を見つめ続けていた。

その後、二人の兵士が運び込まれてきた。
統括官の右腕と呼ばれる男、ジェイと、その部隊にいるフリッツだ。
「……アレク、頼む。フリッツを託生者に。コアなら、あそこのジェラルミンケースにある。統括官から、緊急時に託されていた」
ジェイから受け取った鍵を受け取り、ケースを開く。中には、一つだけコアが残されていた。
「……コアは一つだ。ジェイ、君はいいのか」
ジェイは、かすかに笑う。
「元々俺は…、あの実験以降、壊れてしまっていたんだ。結果、フリッツのことを裏切ることになってしまった…。こんな世界に正しさがないことは知っていたのにな…。だからこそ……フリッツに伝えてくれ。何が正しかったのか、俺の代わりに見つけてくれ、と」
ジェイは何を…？そして、遠くを見るように呟いた。
「……あぁ、誕生日を祝ってやれなかったのが、心残りだな」
次の瞬間、ジェイは懐から銃を取り出し、迷いなくこめかみに当てた。――銃声。
私の目の前で、ジェイは自ら命を絶った。……なぜ、そこまでしたのか。
――フリッツを救いたかっただけなのか。それとも、託生者の資源が、何かを知っていたのか。
私には分からなかった。だが、結果は変わらない。この日、エヴァとフリッツは、託生者となった。

２日前
数日後、過激派アンドロイドがセクター・ヴィータを含む全セクターへ同時攻撃を仕掛けるらしい。
大規模な戦闘が始まる。おそらく、戦争の終わりが近いということだろう。

私は、ふと考えていた。もしこの戦争が終わったとき、私はどこにいるのだろうか。
私には、一つだけ心残りがあった。クララの願いを、叶えてやれなかったことだ。
“お母さんと、お父さんと、私。三人で幸せに暮らせれば、それでいい”
あの言葉は、今も心に残っている。あまりにもささやかで、あまりにも当たり前の願いだった。
だからこそ、叶えられなかったことを悔やんでいた。

私は一人の兵士に頼み、とある場所までの護衛を願った。
彼の名はガンマ。セクター・ヴィータの防衛任務に就いている兵士だった。
向かった先は、空気の汚染も比較的ましな区域。そこには、かつての我が家があった。
鍵は、今も私が持っている。扉を開けると、静かな空気が流れ込んできた。
まるで時間だけが、この場所を置き去りにしたようだった。台所には、昔と同じ皿が並んでいる。
棚の奥には、古いアルバムが残されていた。ページをめくると、小さなクララを背負った私の姿が写っていた。あの頃の写真だ。しばらくそれを見つめたあと、私はクララの部屋へ向かった。

窓際の床板。その一枚だけ、わずかに浮くように細工してある。昔、ここに小さな箱を隠した。
指先に力を込めて板を外す。そこには、薄い金属の箱が残っていた。私はゆっくりと蓋を開ける。
中身を確認する。手紙は、まだそこにあった。
“最愛なる子へ”
この戦争の最中、セレナと私は、もしものときに備えて、それぞれクララへ言葉を残した。
本当は、そんなものが必要になる未来など望んでいなかった。託生者の実験が成功し、クララが無事に二十歳を迎えられたなら、そのときは直接祝ってやりたかったからだ。
だが、戦争が激しさを増す中で、万が一のことを考えずにはいられなかった。
私は手紙を取り出しかけて、やめた。クララが誕生日を迎え、二十歳になるのは二日後だ。
まだ、そのときではない。箱を元の場所へ戻し、床板を静かに閉じる。
この戦争を生き延びることができたなら。そのときこそ、私はクララにすべての真実を話そう。そしてクララと、この家に帰り、家族として暮らすんだ。私はまだ、あの子に幸せを贈れていないのだから。

事件当日
あれから、過激派アンドロイドの襲撃に備え、防衛体制は最大まで引き上げられていた。
託生者の多いセクター・ヴィータでは戦力が各セクターへ分散され、施設内には最小限の精鋭のみが残されている。アンドロイド兵も、それぞれの防衛ラインへ送られていた。

統括官の部屋へと向かう。私とバーバラは、統括官に呼び出されていた。彼は、今回の襲撃に備え、過去に襲撃されたセクターでは毒ガスが使用されたことがあると教えてくれた。
「託生者なら毒ガスに耐性もあるが、我々は危険だ。当日はガスマスクを着用しておけ」

統括官の説明を聞きながら、私は考えていた。コアを持つ託生者ならば、毒ガスに耐えることはできるが、クララの場合、心臓に影響があるかもしれない。娘にも装着させておくべきだろう。そのときだった。バーバラがモニターを指差した。画面の中で、兵士が一人、倒れた。
そして、もう一人。――まさか。その瞬間、統括官が叫んだ。
「毒ガスか！？」
その言葉を聞いた瞬間、クララへの懸念が現実のものに変わった。

私は統括官の部屋を勢いよく飛び出した。研究室にガスマスクがあったはずだ。クララの分を急いで、取りに行かなければならない。私は全力で研究室へと走る。研究室には、幸運にも娘の姿があった。
「クララ！息を止めていろ！」
ガスはいつ充満するかわからない。自分も息を止める。棚からガスマスクを二つ掴み取った。
だが、それだけでは足りない。過激派が侵入する可能性もある。どこかに隠さなければ。
「これをつけて、中に隠れていろ！」
私はクララにガスマスクを手渡した。そして、娘の手を引くと、研究室から繋がる小部屋へクララを押し込んだ。振り返ると、研究室の入り口には人影が。私は背中で、小部屋の入り口を隠す。ガスマスクを装着しようとした、その瞬間だった。甘い匂いが、鼻を突いた。
――遅かったか。視界が揺れ、思考が急速に崩れていく。立っていられない。
私は扉にもたれかかるようにして、崩れ落ちる。そのまま――意識を失った。



――どれほどの時間、意識を失っていたのだろうか。装着されたガスマスクを外すと、隣には何故かクララがいた。ここはクララを押し込めた小部屋だ。誰かが運んでくれたのだろうか。
ぼんやりとした意識の底で、施設内に響く声が聞こえる。
「ザザッ……皆さん、無事ですか？ こちら、ルピナスです。生存者は、至急メインホールへ招集してください」

過去まとめ

【数十年前】

・アレクは「生命の創造」を研究していた。身体を人工的に生成する理論には辿り着いたが、**人間の身体を液体化して資源にする必要があった**。また、**心臓だけは**再現できなかった。

・クララは、セレナとカシウスの娘として生まれた。つまり、**アレクにとってクララは実の娘ではない**。だが、カシウスの死後、アレクはセレナと結ばれ、クララの父として生きることを選ぶ。

・クララは生まれつき足が悪く、歩けない身体だった。さらに、**二十歳まで生きられない心臓病**だと判明する。

・クララは「**誰かの犠牲の上で生きるのは嫌だ**」と語り、願ったのはただ三人で幸せに暮らすことだった。アレクはその願いを叶えるため、再び研究に手を伸ばす。

【10 年前】

・**地下シェルター制御喪失事件**が発生する。

【8 年前】

・戦争の激化により、アレクは統括官の支援を受けてセクター・ヴィータへ移る。研究は、クララを救う手段であると同時に、**軍事利用**も前提とされた。

【5 年前】

・リリアンとの会話をきっかけに、**【アンドロイド暴走事件】について記された歴史書**を読んでいたことを思い出す。その知識も踏まえてリリアンと議論を重ね、アンドロイドのコアを心臓の代わりに用い、人間の記憶を保存する《託生者》の理論を完成。クララは葛藤しながらも、実験を受けることを決意する。

【3 年前】

・実験当日、襲撃を受けた際、セレナがクララを庇って死亡。**クララのために用意していた新品のコアも破壊される**。クララの記憶を保存できないため、記憶の残る頭部だけを残し、**セレナの身体を資源として新たな身体を生成**。そこへ**アレク自身の心臓を移植**し、クララを救った。
その代わりに、**アレクはアンドロイドのコアを移植し、生き延びる**ことになる。

・**リリアンの存在が消えている**ことに、疑問を抱く。

・**託生者の資源が人間の遺体**である事実を機密とする。

・ディーンを託生者にする。**グレイ**は、統括官によって託生者にされた。

【半年前】

・統合生存圏にある搬入エレベーターが襲撃を受ける。**エヴァとフリッツ**を託生者にする。

【2 日前】

・アレクはガンマに護衛を頼み、旧都市の家へ向かう。**二日後のクララの二十歳の誕生日**を迎えるか、戦争を生き延びたら真実を話そうと決意する。

【事件当日】

・施設内にガスが散布され、**クララを守るために行動**する。**託生者には毒ガスへの耐性**があるが、**クララは危険と判断。ガスマスクを渡し、研究室に繋がる小部屋へ隠した**。その後、研究室へ入ってきた人影を前に意識を失う。目覚めると、クララと同じ小部屋にいた。

用語解説

第二次アンドロイド戦争

現在進行中の、ユニオンと過激派アンドロイドとの戦争の総称。
百年前に発生した第一次アンドロイド戦争は、人類の勝利として歴史に記録されている。
しかし、敗北したはずの過激派は影で勢力を再編し、長い年月をかけて戦力を整えていた。
その結果として勃発した本戦争は、人類と穏健派アンドロイド双方を存続の危機へと追い込んでいる。
開戦から十年が経過した現在も、終結の兆しは見えていない。

託生者

託生者は、人為的に生成された人間の身体に《アンドロイドのコア》を埋め込んだ存在。
託生者はコアに保存された記憶や戦闘技術を再現することができる。
さらに身体が欠損・死滅しても、コアを研究施設《セクター・ヴィータ》へ回収すれば、同一の身体を再生成することが可能である。彼らは汚染された環境にも耐え、死を超えて戦い続ける。
それが、ユニオンが戦争のために創り出した“新たな生命”――託生者だった。

アンドロイドのコア

アンドロイドの心臓部には、《コア》と呼ばれる動力中枢が存在する。
人間の心臓とほぼ同じ大きさを持つこのコアは、アンドロイドの稼働と存在を支える要であり、意識や記憶の基盤でもある。
強度はあるが、銃弾以上の威力を防ぐことはできない。
コアが破壊された場合、記憶のサルベージは技術的に不可能とされている。
すなわち、アンドロイドにとっての「死」である。
――そしてそれは、コアを埋め込まれた存在である《託生者》にとっても、例外ではない。

世界規模ネットワーク

すべてのコアは誕生と同時に《世界規模ネットワーク》へ自動的に接続される構造を持つ。
これは、アンドロイドの開発者、アンディ博士によって設計された。
世界規模ネットワークとの接続は生命維持に必要な最低限の同期・維持処理を行うためのものだが、同時に、全てのコアへ干渉しうる唯一の経路でもある。
数百年を経た現在も、このネットワークは秘密裏に稼働し続けており、アンドロイドはその制約から逃れることができない。

統合生存圏

ユニオンによって建設・管理されている、人類のための巨大生存地域。生き残った人類はここに集約され、生活・生産・防衛のすべてが一元的に管理されている。しかし戦争の長期化により環境は著しく汚染され、作物の生産にも深刻な異常が生じた。地上での生活基盤は次第に維持困難となり、残された資源の大半を投入して、統合生存圏の地下に巨大シェルターが建設された。

現在、多くの人類は地上を放棄し、地下シェルターへ移住している。地下と地上を結ぶ正式な経路は、統合生存圏中央部に設置された搬入エレベーターである。

このエレベーターは地下への唯一の公的出入口であり、過激派アンドロイドから守るべき最重要拠点とされている。だが、その構造のすべてを知る者は、ごく限られている。

現在地上に住んでいるのは、過激派アンドロイドと戦うために地上に残ったユニオンの兵士。

彼らはセクターと呼ばれる拠点で生活している。セクターは統合生存圏地上部に点在し、平時は光学迷彩によって覆われ、敵からの視認を防いでいる。

そしてその中でも最も大きいセクターが託生者を生み出した「セクター・ヴィータ」である。

統合生存圏は、現在において人類が長期的に生存可能とされる、唯一の地域である。

セクター・ヴィータ

最初に建設された最古のセクター。研究棟が追加され、今の名称に変わった。

指定された座標データを用いることでのみ、セクター内部へ侵入することが可能である。

現在、セクター・ヴィータは最高責任者である統括官と、その補佐であるルピナスによって共同管理されている。セクター・ヴィータは研究セクターであると同時に、前線へ向かう兵士たちの中継拠点でもあり、各セクター（セクター1、セクター2など）には戦闘部隊が配備されている。

セクター内部は、研究区画・居住区画・医療区画・出撃区画など、明確な役割を持つ区画に分割され、厳重に管理されている。

過激派アンドロイド

もともとアンドロイドには、人間へ危害を加えられないセーフティ機能が備わっていた。

しかし過激派は、その制限を自ら排除することで、人間への敵対行動を可能にした。

その後、人間に似せた外見を捨て、戦闘に特化した身体へと再設計している。

現在の異形の姿は、対人セーフティを解除した存在であることの象徴でもある。

彼らは、通常のアンドロイドと同じく心臓部に《コア》を持つ。コアは高い硬度を備えており、刃物による攻撃では損傷を与えにくい。場合によっては、攻撃側の刃物が損傷することもある。そのため、過激派との戦闘では、コアを破壊する手段として銃弾以上の威力が有効とされる。

また、鹵獲や解析を防ぐため、自爆機能を搭載している。そのため、彼らのコアを流用することはできない。過激派は数百年前より人類と交戦を続けており、最終目的は人類の完全な絶滅にある。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

次ページ以降は指示があるまで開かないでください。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

登場人物　（公開情報）

アレク・ヴァレン
研究者



エヴァ・ソリス
遊撃兵



グレイ・ノア
参謀



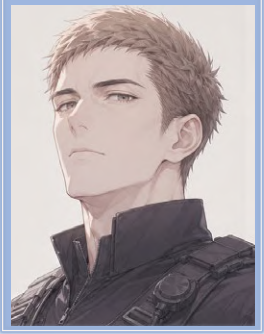
ディーン・カルダー
突撃兵



クララ・ヴァレン
オペレーター



フリッツ・クライン
工作員



バーバラ・ロウ
カウンセラー



統括官　/　ルピナス
NPC



進行（公開情報）

序幕（４０分）
- キャラクター選択
- キャラクターブック読み込み　４０分

第一幕（２５分）
- 読み合わせ①
- 読み込み　１分
- 第１セット　調査７分
- 第２セット　調査７分
- 第３セット　調査７分

第二幕（５０分）
- キャラクターブック読み込み　２０分
- 読み合わせ②
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分

第三幕（６０分）
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第３セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第４セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 全体議論　１０分

終幕
- 推理発表（最大２分×７人＝14分）
- 投票
- エンディング